

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要16

2006. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要16

2006. 3

徳島市教育委員会

例　　言

- 1 本書は平成14・15年度に徳島市内に所在する埋蔵文化財包蔵地において実施した発掘調査および確認調査の内、2遺跡2件についての概要報告書である。
- 2 本書の費用は徳島市教育委員会の負担による。
- 3 発掘調査は、徳島市教育委員会社会教育課勝浦康守が行った。
- 4 本書の編集・執筆は勝浦が行った。
- 5 遺構写真、遺物写真的撮影は勝浦が行った。
- 6 発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて徳島市教育委員会が保管している。
- 7 本書の作成に係る作業には、調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

佐伯俊裕　倉佐晃次　中野勝美　青木健司　露口啓子　折野絵美　中西洋子



調査地位置図（国土地理院発行1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

1 徳島城下町跡「出来島」 2 観音寺遺跡

本文目次

例 言

I 徳島城下町跡「出来島」

第Ⅰ章 遺跡の立地と調査経緯	1
第Ⅱ章 調査の結果	2
1) 層序の概要	2
2) 遺構と遺物	5
i) 土壙 SK11	5
ii) 土壙 SK29	5
iii) 土壙 SK10	6
iv) 土壙 SK22	6
v) 土壙 SK22	6
vi) 土壙 SK35	6
vii) 土壙 SK30	6
viii) 井戸 SE01	6
ix) Pit13	8
3) 調査成果のまとめ	8

II 観音寺遺跡

第Ⅰ章 遺跡の立地と調査経緯	9
第Ⅱ章 調査の結果	10
1) 層序の概要	10
2) 遺構と遺物	10
i) 沟 SD0302	10
ii) 掘立柱建物跡 SB0301	10
iii) 掘立柱建物跡 SB0302	10
3) 調査成果のまとめ	13

挿図図版

写真図版

挿図図版

I 徳島城下町跡「出来島」

- 図1 調査地の位置 (S= 1 : 5,000)
(安政年間の御山下島分絵図「出来島」と現在
の地形図を合わせたもの)
- 図2 土層模式図（上）・遺構配置図（下）
- 図3 第1～3層（1・3～13・15～41）、石組溝（2・
14）出土遺物
- 図4 土壙 SK11(47～61)、SK29(62～66)、SK10(67～
77)、SK17 (78・79)、SK22 (80・81)、SK35
(82・84)、SK30 (85・86)、井戸 SE01 (87・
88)、Pit13 (89～91) 出土遺物

II 観音寺遺跡

- 図1 調査地の位置 (S= 1 : 1,000)
- 図2 遺構配置図
- 図3 溝 SD0302 (1～42)、掘立柱建物跡 SB0301
SP01 (43～45) 出土遺物

写真図版

I 徳島城下町跡「出来島」

- 図版1 上：検出遺構
下：土層堆積状況
- 図版2 上：土壙 SK30遺物検出状況
中：土壙 SK30壁面
下：土壙 SK29遺物検出状況
- 図版3 上：土壙 SK10遺物検出状況
中：土壙 SK33遺物検出状況
下：瓦窯業
- 図版4 上：導水施設
中：導水施設
下：石組溝
- 図版5 第1～3層（1・4～13・16～20・22～26）、
石組溝（2・14）出土遺物
- 図版6 第1～3層出土遺物
- 図版7 第1～3層（39～46）、土壙 SK11 (47～49・
51・52・56・59・60) 出土遺物
- 図版8 土壙 SK29 (62～66)、SK10 (67～69・71・
75～77)、SK17 (78・79)、SK22 (80) SK35
(82・84)、井戸 SE01 (87・88)、Pit13 (89)
出土遺物

図版9 Pit13出土遺物

- II 観音寺遺跡
- 図版1 上：溝 SD0302
下：溝 SD0302壁面
- 図版2 上：掘立柱建物跡 SB0301
下：掘立柱建物跡 SB0302
- 図版3 上：掘立柱建物跡 SB0301SP01
下：掘立柱建物跡 SB0301SP02断ち割り
- 図版4 溝 SD0302出土遺物
- 図版5 溝 SD0302出土遺物
- 図版6 溝 SD0302出土遺物
- 図版7 溝 SD0302 (36～42)、掘立柱建物跡 SB0301
SP01 (43～45) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とくしましまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう						
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要						
副書名							
巻次	16						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	勝浦康守						
編集機関	徳島市教育委員会						
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 088-621-5418						
発行年月日	西暦 2006年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ード 市町村	北 緯 <small>度分秒</small>	東 経 <small>度分秒</small>	調 査 期 間	調 査 面 積 <small>m²</small>	調 査 原 因
とくしまとうきょうまち 徳島城下町跡 できじま 「出来島」	とくしまとくしま 徳島県徳島市 でくしま 東出来島町	36201	34度 4分 23秒	134度 33分 1秒	20021016～ 20021125	258	マンション建設工事に伴う 事前調査
かんのんじ 観音寺遺跡	とくしまとくしま 徳島県徳島市 でくしま 国府町	36201	34度 3分 56秒	134度 28分 30秒	20031212～ 20040304	180	阿波国府跡所在確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳島城下町跡	城下町	近世	土壌・溝・ピット 井戸	陶磁器・土製品	
観音寺遺跡	官 集 衙 落	奈 良 境	掘立柱建物跡 ピット 竪穴住居跡	土師器・須恵器 瓦 製塙土器	

I 德島城下町跡「出来島」

第Ⅰ章 遺跡の立地と調査経緯（図1）

徳島城下町跡は天正13（1585）年、蜂須賀の阿波国入府後、徳島城の建設とともに進められ、その特徴は吉野川下流域の低位沖積地における島普請にある。調査地は安政年間（1854～1860）に描かれた御山下島分絵図「出来島」では、御手廻之者御貸長屋および徳島藩士山内権之丞の屋敷地の一画に該当することがわかる。ただ、江戸時代後期に御手廻之者御貸長屋である屋敷地については、元禄4（1691）年の御山下画図では徳島藩士赤川次左エ門（400石・裁許目付）、また、天明年間（1781～1789）の御山下画図では、林歛太郎（1303石・中老）の名前が見られることから屋敷替が行われている土地である。この場所は讃岐街道沿いにあたることから、赤川・林、その西隣には中尾半（600石・中老・物頭）といった藩の要職に付していた人物の屋敷が構えられた経緯がある。

調査はマンション建設工事に伴うものであり、建設予定地に幅6m、延長43mの調査区を設定した。調査地では大小規模の搅乱が散在し、掘削深度が1.5m以上を測るものもみられるが、主として江戸時代後期の遺構と遺物を確認している。



図1 調査地の位置 ($S=1:5,000$)
(安政年間の御山下島分絵図「出来島」と現在の地形図を合わせたもの)

第Ⅱ章 調査の結果

1) 層序の概要 (図2・3、図版1・5~7)

調査地周辺の現地表面の標高はT.P.+1.3mを測り、現代盛土層(第0層)下に第1~6層が堆積する。良好な状況で堆積が確認できる西壁断面を取り上げて基本層序を模式図として概説する。

第0層：現代盛土および搅乱層である。

第1層：下層の第2層を切り込む遺構の埋土であり、細分が可能である。本来の切り込み面は不明である。出土遺物より江戸時代後期～明治時代の遺構埋土である。

第1-a層：浅黄色～黄灰色砂礫混じりシルトで、最も新しい時期の遺構埋土である。

第1-b層：浅黄色砂礫混じりシルトで、遺構埋土である。

第1-c層：淡黄色砂礫混じりシルトで、遺構埋土である。

第2層：層厚20cmを測るにぶい黄色砂礫混じりシルトで、江戸時代後期の整地層である。

第3層：下層の第4層を切り込む遺構埋土である。調査地全域での断面観察による限り遺構密度は高くない。

第4層：層厚40cmを測る浅黄色～にぶい黄色細～粗砂混じりシルトの整地層であり、遺構検出ベース層である。

第5層：層厚20cmを測る黄褐色砂礫混じりシルトで炭を含む。調査地全域では見られず、部分的な凹地での堆積層である。

第6層：明緑灰色粘土質シルト～浅黄色粘土質シルトの水成堆積層である。

遺構検出ベースである第4層より上位層、および調査地南端で確認した第0層を埋土とする石組溝出土の遺物について概略する。

第1~3層より、肥前系磁器蓋1、碗3~7・15、蓋物8、ミニチュア碗9・10、紅皿11、段重12、13、小壺16、仏飯器18、徳利39、瀬戸美濃系磁器碗3・23・24、皿17、瓶40、陶器灯明受皿29、京信楽系陶器蓋19、碗25、灯明皿28、産地不明陶器蓋20~22、萩焼碗26、珉平皿27、大谷焼灯明皿30、台付灯明受皿32~34、鉢36、壺37、徳利38、秉燭31、火打ち石35、箱庭道具42、泥面子43・44、陶製人形45、磁製人形46、石組溝から肥前系磁器蓋2、碗14が出土している。

1・2は染付で、1は外面に草花文、口縁部内面に雷文、見込みは一重圓線内に環状の松竹梅文で、疊付無釉である。2は外面に富士山と龍の銅版転写で、疊付無釉である。

3・4は染付で、外面は草花文、4は口縁部内面に雷文、3の見込みは二重圓線内に花文、4は一重圓線内に環状の松竹梅文である。5は広東碗で外面に草花文、口縁部内面に龍文、見込みは一重圓線内に鶯文である。6・7は染付で外面に草花文、口縁部内面に雷文、6は見込みに一重圓線内に環状の松竹梅文、7は一重圓線内に龍文である。

8は基筒底で、底部にアルミナ砂が付着、体部下方の文様は銅版転写である。

9・10は染付で、11は白磁で外面に貝の放射脈を表現した型押成形である。

12は色絵染付、13は染付で、口縁部と腰部が無釉である。14~16は白磁で、疊付無釉で離れ砂が付着している。17・18は染付で、17は内外面に仙芝文、疊付無釉である。

19は黄白色の硬質胎土で外面に灰釉をかける。20・21は橙色の軟質胎土で、20は外面に柿釉をかけ、底部内面に回転糸切り痕、煤が内面に付着、21は内外面に柿釉をかけ、摘みの横を外面から貫通する穿孔を施す。

22は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、高台内と見込みは無釉である。23・24は染付で、23は口銘で、外面に篆書文である。

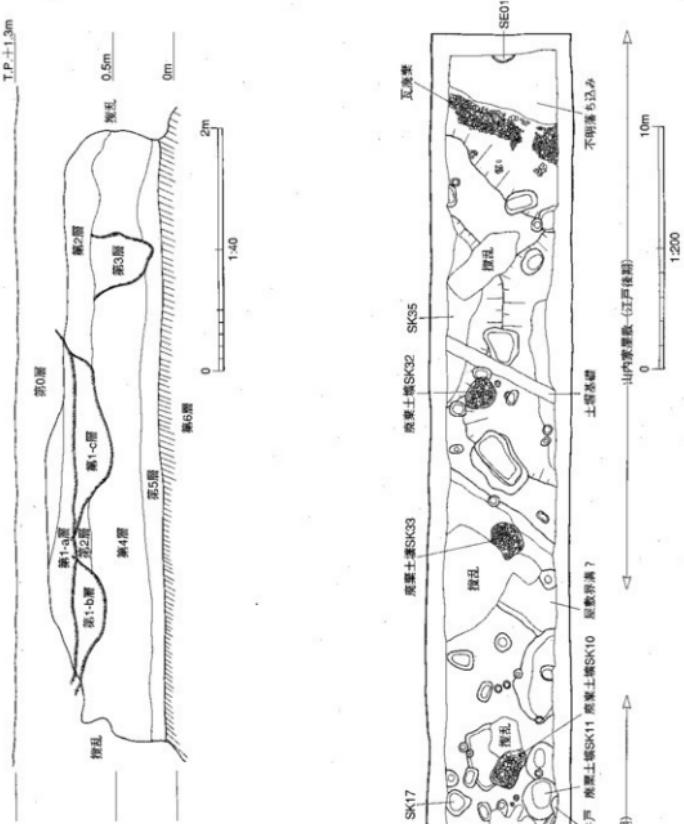


图2 土层模式图(上)·遭構配置图(下)



図3 第1～3層（1・3～13・15～41）、石組溝（2・14）出土造物

25は黄白色硬質胎土で、灰釉をかけ高台無釉である。26は外面にピラ掛け、高台内に巴形のケズリ痕がある。27は緑釉をかけ、見込みに龍の陰刻、底部外面に3箇所のハリ目跡がある。

28は灰白色的硬質胎土に灰釉をかけ、外面無釉、口縁部に灯芯油痕、見込みに3箇所のハリ目跡がある。29は淡黄色の硬質胎土に灰釉をかけ、仕切りに浅いU字状の切り込みを入れる。30は台付灯明受具に付属する灯明皿である。31は褐色の軟質胎土で灯芯用の突起部に褐色をかけ、突起部に切り込みを入れる。底部外面に固定用の小穴がある。

32~34は台付灯明具でいずれも皿が剥がれている。35は火打ち石用のチャートの石核である。

36・37は褐色の硬質胎土で、36は外面に鉄釉、内面と底部は無釉で、底部外面に足を貼り付けている。38は肩部に「酒 出来島 宮本」の印刻がある。39は外面に蛸唐草文である。

41は淡黄色の硬質胎土で、内外面に鉄釉をかけ、体部外面に黒釉を流しかける。高台無釉で高台内に同心円状のケズリ痕がある。

2) 遺構と遺物 (図2~4、図版1~9)

安政年間に描かれた御山下島分絵図「出来島」では、調査地は江戸時代後期の御手廻之者長屋と山内権之丞の屋敷地に跨り、いずれの屋敷においても周縁部にあたる。御手廻之者長屋については、前述したように幾度かの屋敷替の経緯をもつ屋敷地であるが、いずれの時期にしても、屋敷地の周縁部に該当する。

調査では第4層上面において、瓦や陶磁器を廃棄した小規模な土壤、井戸、石組溝、導水施設を確認している。屋敷界付近には前代からの屋敷界を継承すると考えられるコンクリート製の擁壁が残存するが、屋敷界の遺構については上位層が攪拌を受けているためか明確ではない。

i) 土壙SK11 (図2・4、図版7)

長径1.6m、短径1.3mの平面形が梢円形を呈し、深さ30cmを測る廃棄土壤である。

出土遺物には、肥前系磁器蓋47・48、碗49~53、小壺55、產地不明陶器壺54・61、鉢60、京信楽系陶器鉢57、碗58、瀬戸美濃系陶器德利56、磁器碗59がある。

47・48は染付で、47は銅版転写、48は外面に算木文、見込みは一重圓線内に太極文である。

49~52は染付で、49は銅版転写、53は色絵染付である。54は灰色の硬質胎土で、内面に灰釉をかけ、底部外面に回転糸切り痕がある。55は白磁である。56は黄白色の軟質胎土で、外面に灰釉をかけ鉄絵を施し、緑釉を流しかけし、底部外面に同心円状のケズリ痕がある。

57は灰白色的硬質胎土で、内外面に灰釉をかけ、外面は青・茶で草花の色絵を施す。口銚で体部上位に文様を切り込む。58は淡橙色の硬質胎土で、内外面に白泥を塗り灰釉をかける。

59は染付で、外面は篆書文、口銚である。60は褐色の硬質胎土で、鉄釉をかけ高台無釉で、口縁部下にU字形の切り込みを入れ、注ぎ口を貼り付ける片口鉢である。高台内に同心円状のケズリ痕がある。

61は灰色の硬質胎土で、内外面に灰釉をかけ、底部無釉である。

ii) 土壙SK29 (図2・4、図版2・8)

調査地外へ広がり、長径1.7m、短径60cmの平面形が半梢円形を呈し、深さ20cmを測る廃棄土壤である。

出土遺物には、京信楽系陶器蓋62、肥前系磁器壺63、仏飯器64・65、產地不明陶器蓋66がある。

62は黄灰色の硬質胎土で、外面に灰釉をかける。63~65は染付で、63は壺付無釉、高台に白泥が付着している。

66は内外面に鉄釉をかけ、口縁部無釉、外面は飛鉢装飾に白泥による文様を施す。

iii) 土壙 SK10 (図2・4、図版3・8)

長径1.4m、短径90cmの平面形が隅丸長円形を呈し、深さ25cmを測る廃棄土壙である。

出土遺物には、產地不明陶器蓋67、ミニチュア鉢68、京信楽系陶器香炉69、皿70、瀬戸美濃系陶器皿71、土師質皿72~74、泥面子75・76、土人形77がある。

67は浅黄色の硬質胎土で、外面に灰釉をかけ白イッチンによる花文、口縁部外面に1条沈線を廻し、摘み頂部に巴形のケズリ痕がある。

68は土師質で底部外面に回転糸切り痕がある。69は黄白色の硬質胎土で口縁部~外面に鉄釉をかけ、内面および底部は無釉である。高台の外周に円錐状の三足を貼り付ける。

70は黄白色の硬質胎土で、内面に灰釉をかけ、外面無釉、内面に3条単位の摘目とハリ目がある。

71は型打成形の灰釉裝皿である。

iv) 土壙 SK17 (図2・4、図版8)

径90cmの不整形円形を呈し、深さ15cmを測る廃棄土壙である。

出土遺物には、肥前系磁器碗78、瀬戸美濃系磁器碗79がある。

78は染付で、輪花型打成形である。79は染付で、外面は篆書文、口銹である。

v) 土壙 SK22 (図2・4、図版8)

長径1.8m、短径1.2mの平面形が長円形を呈し、深さ20cmを測る廃棄土壙である。

出土遺物には、京信楽系陶器合子80、肥前系磁器皿81がある。

80は灰白色の硬質胎土で、灰釉をかけ、口縁部と底部は無釉である。81は染付で、輪花型打成形である。

vi) 土壙 SK35 (図2・4、図版8)

調査地外へ広がり、形状については明確でないが、池状造構の可能性がある。

出土遺物には、肥前系磁器坏82、蓋83、京信楽系陶器碗84がある。

82は外面に赤絵を施す。83は染付で、高台内に二重方形枠内「寿」である。84は黄白色の硬質胎土で内外面に灰釉をかけ、高台無釉、外面に鉄絵の小杉碗である。高台内に同心円状のケズリ痕と中央に円錐状のケズリによる小突起がある。

vii) 土壙 SK30 (図2・4、図版2)

調査地外へ広がり、長径3m、短径1.2mの平面形が半円形を呈し、深さ50cmを測る廃棄である。

出土遺物には、瀬戸美濃系ミニチュア鉢85、肥前系磁器坏86がある。

85は黄白色の軟質胎土で、内外面に灰釉をかけ、底部無釉、外面に貼り付けた菊花文に緑釉を塗り、口縁部から内面に緑釉をかけ流す。86は白磁である。

viii) 井戸 SE01 (図2・4、図版8)

調査地において平面形1/2を確認している。掘形の平面形は1.2mの円形を呈し、井戸側中央に導水用に打ち込まれた竹管がある。

出土遺物には、肥前系磁器蓋87、瀬戸美濃系磁器碗88がある。

87は染付で、外面に草花文、口縁部内面に雷文である。88は染付で、口銹である。

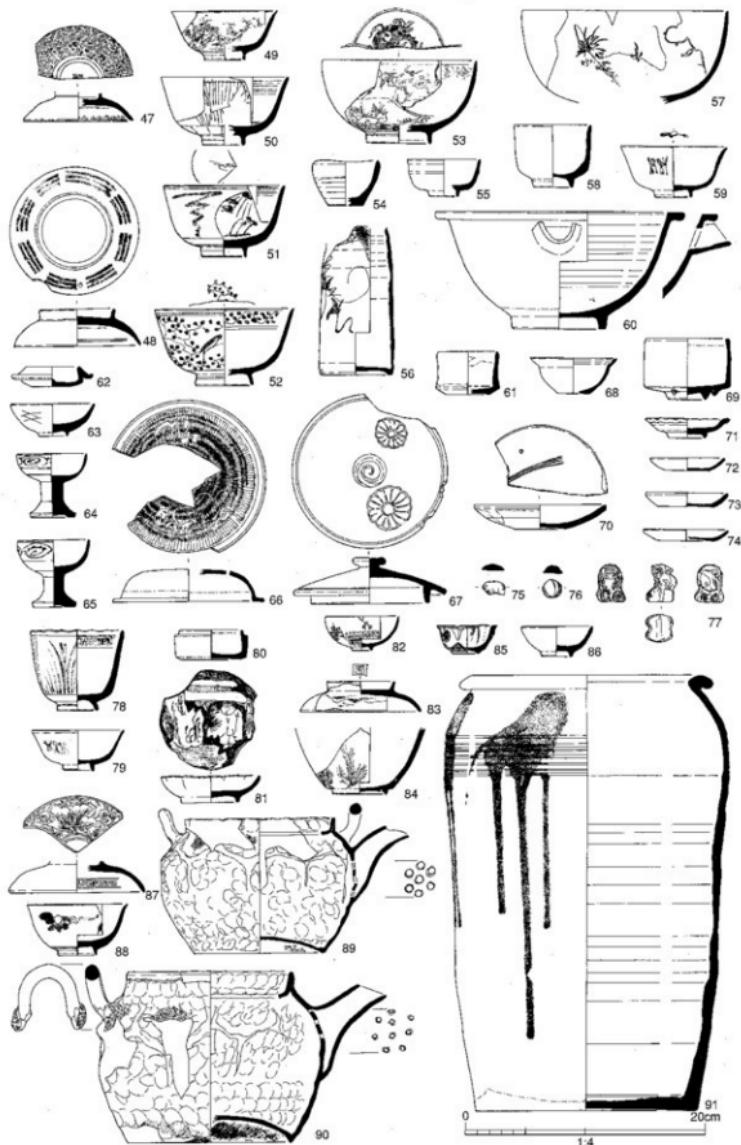


図4 土壌SK11(47~61)、SK29(62~66)、SK10(67~77)、SK17(78~79)、SK22(80~81)
SK35(82~84)、SK30(85~86)、井戸SE01(87~88)、Pit13(89~91)出土遺物

ix) Pit13 (図2・4、図版8)

径40cmの平面形が円形を呈し、深さ10cmを測る。

出土遺物には、産地不明陶器土瓶89・90、甕91がある。

89・90の外面は亀甲型押しで布目痕が部分的に残り、89の底部外面には布目痕がある。89は無釉、90は内面に灰釉をかける。91は外面は褐釉をかけた後、黒釉をかけ流す。

3) 調査成果のまとめ

調査地は江戸時代前期から武家屋敷であったにもかかわらず、今回の調査では19世紀代の遺構・遺物が主である。これは調査地が江戸時代を通じ一貫して、屋敷地の周縁部に該当することと起因しているかもしれない。屋敷における土地利用は、まず建屋の領域そして建屋を中心とした周縁部への広がりが考えられ、時代の経過とともに、屋敷周縁部での活用（例えば、不用物資の廃棄場や井戸の設置場として）が活発化することが考えられる。

このことを検証するには、一つの屋敷を全面的に調査する必要がある。断片的な調査ではこの課題は解決されないが、一つの指標として、屋敷周縁部における古い段階の遺物を含む整地層の堆積の有無が挙げられる。即断はできないが、今回の調査では、遺構検出ベース層（第4層）以上の整地層および遺構からは19世紀代後半の遺物が圧倒的であり、古い段階での整地が認められないことを考慮すれば、時間的経過に伴う利用場の拡散という土地利用形態の一例として考えられるかもしれない。ただし、屋敷内における土地利用形態については、各屋敷ごとの独自性が考えられることから、このような状況を普遍的に捉える訳にもいかない。

また、通常、徳島城下町跡の調査において確認される屋敷界の溝については、ほぼ同一場所において新旧溝の変遷がみられ、屋敷界は江戸時代を通じて基本的に継承される。この原則に立てば、絵図との照合において、今回の調査地が二つの屋敷地に跨っていることから、屋敷界の痕跡が存在すると仮定される。調査では土堀の基礎部と考えられる栗石を敷き詰めた跡があり、概ねこの付近が屋敷界と考えられる。ただ、これについては後世の構築物の可能性があり、江戸時代における屋敷界の変遷過程を示す遺構については、今回、明確にし得ていない。

この理由として二つの可能性が考えられる。一つは、屋敷界付近の土地の攪拌に伴う遺構の消失、もう一つは、本来、屋敷界の遺構が明確でなかったと考えることである。屋敷界の溝についても、細部については、屋敷内の土地利用形態同様に城下町の中での地域性や屋敷間での個別性が考えられ様相は一定しない。一つ一つの調査事例を的確に捉えていくことが、徳島城下町跡の解明を即決していく何よりもの早道である。

II 観音寺遺跡

第Ⅰ章 遺跡の立地と調査経緯（図1）

今回の調査地は第16番札所観音寺の北西120mにあたり、調査地は現存条里地割（N-10°-W）と同方位の道路により区画された方1町内に位置し、1997年に観音寺木簡が出土した旧河川部の東側に隣接する地域である。この区画内では、2004（平成15）年に発掘調査^⑪を実施し、掘立柱建物跡1棟を確認している経緯がある他に調査事例はない。

調査は阿波国府跡所在確認調査の一環であり、2004年に実施した際に確認された掘立柱建物跡の南側で実施し、トレンチ掘削で造構確認を先行させた後に、建物跡の規模・構造把握のための部分拡張を行い調査を進めた。

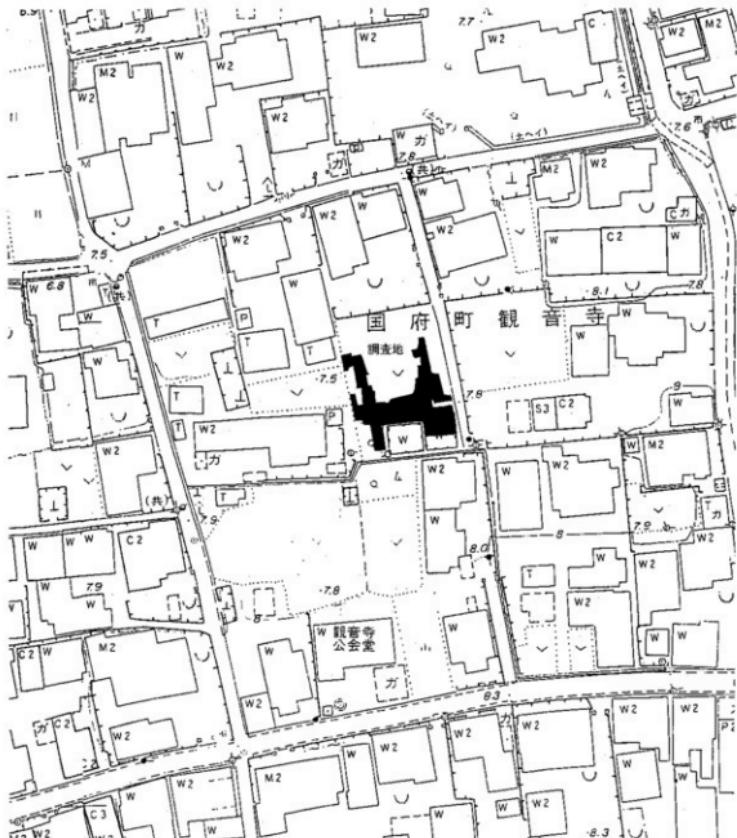


図1 調査地の位置 (S=1:1,000)

第Ⅱ章 調査の結果

1) 層序の概要

調査地周辺の標高は、T.P. +7.4mを測り、現代耕作土層（0層）下に第1～3層が堆積する。以下、上位より概説する。

第1層：層厚30cmを測る黄褐色砂礫混じりシルトであり、近世陶磁器を含む。

第2層：層厚20cmを測るオリーブ黒色砂礫混じりシルトであり、弥生～古墳時代の遺物を含む。

第3層：黄色シルト～灰黄色砂礫で構造検出ベース層である。

2) 遺構と遺物

調査では、掘立柱建物跡、溝、土壤、竪穴住居跡を確認している。なお、竪穴住居跡は、掘立柱建物が構えられる以前の6世紀後葉の遺構である。

i) 溝 SD0302 (図2・3、図版1・4～7)

溝の北側の立ち上がりを確認し、南側の立ち上がりは既存構造物で未確認であるが、推定幅3.5m、深さ20～40cmを測る東西方向の溝である。溝の底部は局部的に深みを増す箇所がある。また、既存構造物の左右で確認している溝の掘形ラインの連続性には不自然さがあることから、収束形態の溝と考えられる。方位は建物跡と同方位であり、建物を区画する溝と考えられる。

出土遺物には、土師器壺（1～10）、皿（33・34）、高壺（36）、甕（38）、須恵器蓋（11～21）、壺（22～25）、高台付壺（26～32）、皿（35）、甕（37）、瓦（39）、製塙土器（40～42）がある。

壺1～10はいずれも口縁端部を丸くおさめるもので、表面が剥落しているが赤色塗彩が施されている。11～21は、水平な天井部から屈曲し口縁端部を垂直に折り曲げ、宝珠もしくは擬宝珠の摘みを貼り付ける。26・28・29の高台は、底部と体部の屈曲部にあり断面形が四角形を呈する。27・31は高台端部外側に設置点があり、31・32の高台端面は、わずかに凹面を呈する。須恵器の焼成は全般に不良である。33・34は口縁端部を肥厚させ、口縁部内面に沈線を廻す。いずれも赤色塗彩が施されている。36の壺部の口縁端部は肥厚させるタイプで赤色塗彩が施される。37は口縁端部内側が肥厚し、内外面にタタキ痕がある。40～42は砲弾形を呈する。

ii) 掘立柱建物跡 SB0301 (図2・3、図版2・3・7)

桁行4間、梁行2間の南北棟の側柱建物跡であると考えられるが、建物西側部が調査地外へ広がるため建物の規模・構造については明確ではない。柱穴掘形は一辺1.1～1.2mの方形を呈し、柱径は35～40cmを測る。柱間寸法は東側柱が南から2.70～2.36～2.70～2.49m、南側柱が東から2.36m、北側柱が東から2.40mを測り、柱間寸法のばらつきは著しい。建物方位は現存条里地割と同方位のN-10°～Wである。南側柱東から2列目の柱穴SP01の掘形から土師器蓋（43・44）、壺（45）が出土している。

43・44は水平な天井部から屈曲し口縁部を垂直に折り曲げ、45は口端縁部を肥厚させる。いずれも赤色塗彩が施される。

iii) 掘立柱建物跡 SB0302 (図2、図版2)

桁行3間、梁行2間の南北棟の側柱建物跡である。柱穴掘形の平面形が、長辺65～85cm、短辺60～70cmの長方形を呈し、柱径は15cmを測る。柱間寸法は東側柱が南から1.80～1.77～1.80m、北側柱が東から1.62～1.59mを測る。北側に1間分の空間が見られるが、身舎柱から2.04m離れ身舎の柱間隔より長大である。桁行4間の建物の北側1間分を間仕切りしているかもしれない。建物方位は現存条里地割と同方位のN-10°～Wである

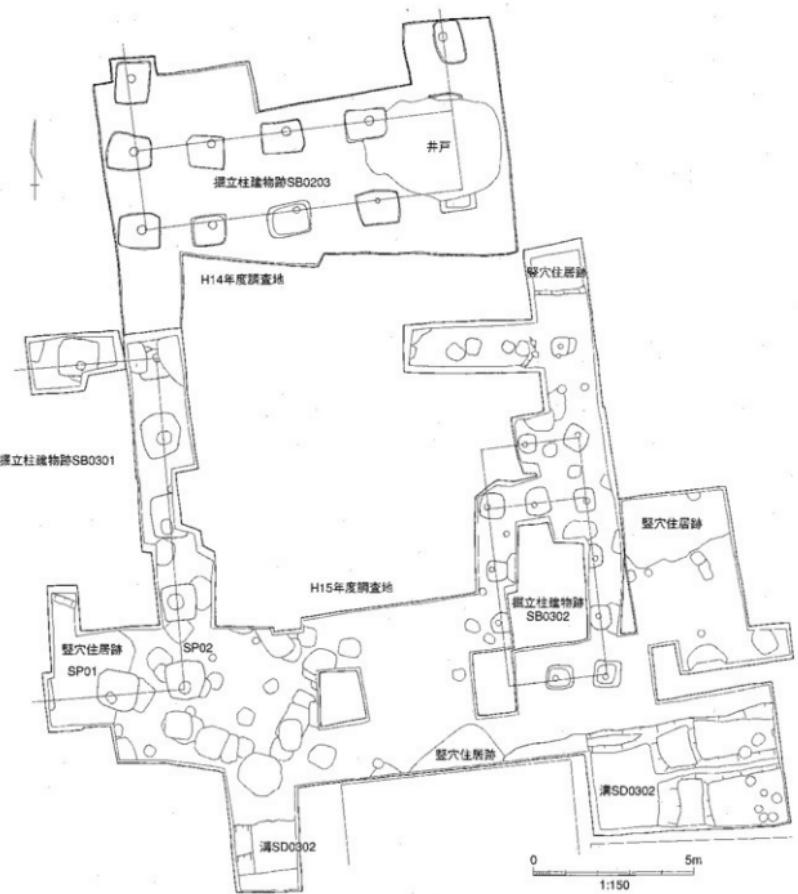


図2 造構配置図

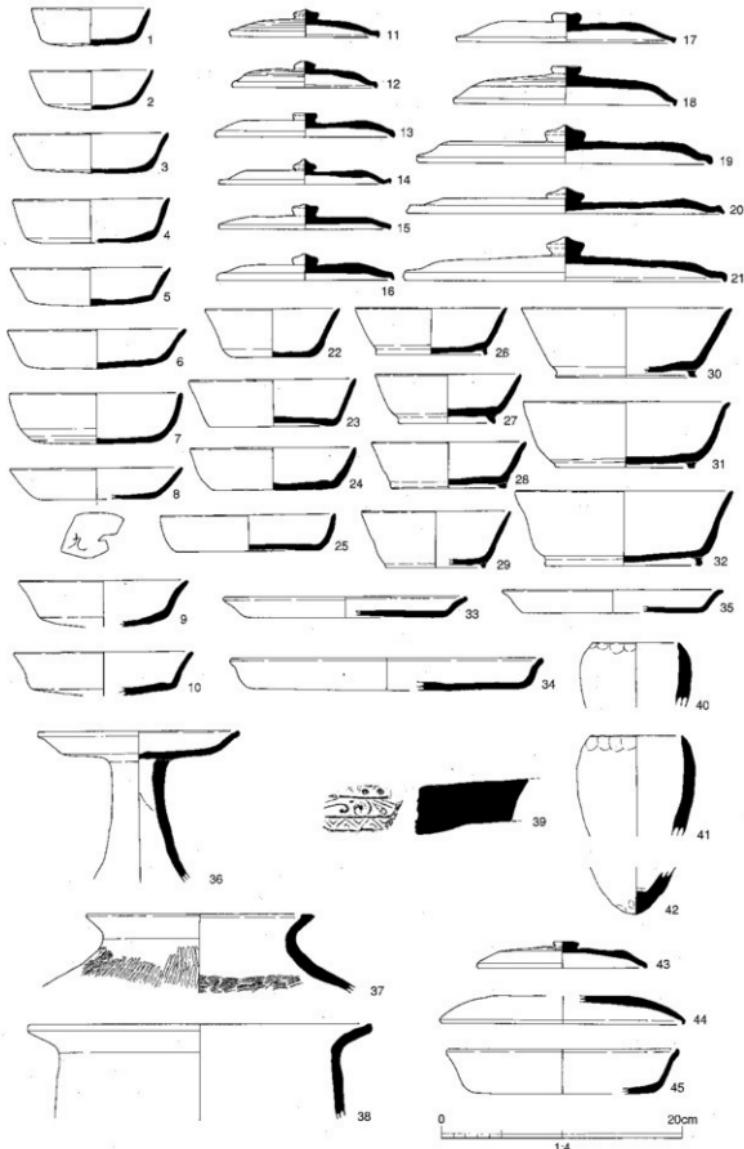


図3 溝SD0302（1～42）、据立柱建物跡SB0301SP01（43～45）出土遺物

3) 調査成果のまとめ

2004(平成15)年に確認した建物跡SB0203と今回確認した建物跡SB0301とSB0302の3棟は、SB0203を主棟に左右副棟としSB0301とSB0302のコの字形の建物配置が考えられるが、左右対称形態ではない。SB0203の西側柱とSB0301の東側柱の柱筋が合わされていることから、当初からの計画性が窺えるが、この2棟に比較して、建物跡SB0302は小規模であり、SB0203・SB0301の配置とは柱筋がずれている。全体の割付の不精緻さの表れであろうか。また、建物個々においては柱間隔がばらつきが著しく、いずれの建物も設計上精度の高い構造ではなく、純然たる官衙施設の建物跡であるとは言い難い。ただ、溝SD0302から出土する瓦片や製塙土器は、建物跡の特異性として捉えることができる。

出土遺物の土師器・須恵器の各形態における法量分化は、概ね土師器坏で3分化、須恵器坏で3分化、蓋で4分化であり、法量の縮小整備と土師器と須恵器の互換性が進行していると考えられる。土師器は回転台成形によるもので、赤色塗彩に対する意識が極めて強い。

これらの建物跡の年代観については、SB0301SP01出土遺物より平城並行の8世紀前葉の造営⁽²⁾、そして、いずれの建物跡にも建替の痕跡が見られないことから、建物跡を区画すると考えられる溝SD0302の出土遺物が示す長岡並行の8世紀後葉が廃絶期と考えられる。また、これらの建物群はN-10°-Wを指向することから、現存条里地割の施行は少なくともこれらの建物跡の造営段階まで遡るであろう。

従来、阿波国府跡の中心部である政府跡の所在地の候補地として最も有力視されてきたのが第16番札所觀音寺周辺である。今回の建物群跡の性格については、突出したものを考えることはできないが、この地域の重要性を今後も考えていかなければならない。

註)

(1) 徳島市教育委員会『阿波国府跡発掘調査報告』2003年

(2) SB0203の時期については、出土遺物より飛鳥・藤原並行の7世紀後葉としたが、SB0301SP01出土遺物を考慮の上、この地域における建物跡の年代観を訂正する。

写 真 図 版



検出遺構

北から



上層堆積状況

南東から



土壤 SK30遺物検出状況 東から



土壤 SK30壁面 東から



土壤 SK29遺物検出状況 西から



土壤 SK10遺物検出状況 北から



土壤 SK33遺物検出状況 北西から



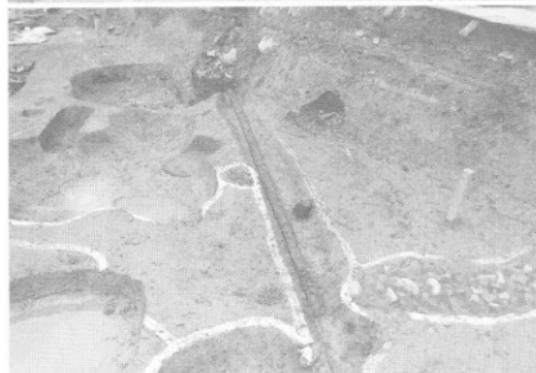
瓦廃棄

西から



導水施設

西から



導水施設

南西から

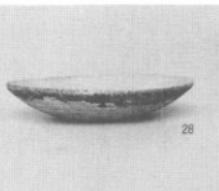


石組溝

南から



第1~3層(1・4~13・16~20・22~26)、石組溝(2~14)出土遺物



31



35



第1～3層出土遺物